花鳥餘情抄中　十五之六

九曜文庫

花鳥餘情第十五 常夏 篝火 野分

並四 常夏

此詞并秋鳥巻名 但詞にはみえすしてこと
あり 一説二名也 又并にはなくしてこれ
ところのことはとあり 源氏卅六歳の六
月より又竪の並也
侍とありき目ひんしれはりとのありしつく猶
てもこみゆふ

京中名跡記 釣殿院号六条院 光孝
天皇の御所也 六条東洞院にあり今

物語りに云六条院の釣殿六条京極
也各別の所也　うつほ　祭の使の所か
とりのまへひとおりの石をたてゝ池ひ
ろくふかくつくりて魚ふきつくりて
ひくをひろ水のうへにさし出し
たてしるし中将よりこぼして水有
のつきにつりをも浄めけてつり殿し
き釣殿つくれたいしき舟ともおろし
しらさせしこまつしてありき日さかり
にも人をとゝみなとし給へり十二月つと

其の日わたりたまひて釣殿のあり
てきふもことまゝ見事なふみかむしくさ
ものあつく給へつく先出しとき給ふ物ぞ
りそてくれきんくてらなと給ふひ給よ
おもへの池よりわたりあつし物あ給ひて
こいまなとら球とさへひしあかさらつ所
ふさぞりそてさせつゝ物つきし山りひ
めかあく中将よりこりいそ物つきこ
こちともみりかいひそあなしてとみ
あるひ給くあつしのあとくきのこよ

はしたなき物とはひとりもあたらうし
やるかたもなき侍従はひとりなれかしか
うき世あはれなる人よしのはなりもなくさ
ぬうちさるの御へおとろきその御つ
ありしまれはみとこ御なきわたらひ人こそ
きこく京ありぬりて御殿へまかりつ今案
ありき日はりとのよ人くもとこそていとなか
とてありし御車此物語よ面み似
御ありしまきのことかあれ
はしかはらうちてあゆみあはれかいまへまいりてうし

西宮抄云禁河　堤河たゞ門府検［葛野河右衛門府検知］　河上夏供奠
今案堤河東河也葛野河は西河之
ちかき河のいふしるし
亭子院御集云いつみの池のまへ
よみてまいりてまうてをこうれん中
利あへるいひとえをはあるひとこそ
え一こりいふしふかつれさせわつさき
めこそつきせくわと御まへすゝ人へ〳〵
してさをさせ給へまいりてまう
和名云鯷（伊之不之）　音義和名　性伏沈在石間者也

ひ水かして

枕草子にいへるをありきけるの中にいれ
なとさとをんとおほきの風にめなしひあ
りてをひとしてとくさく程なり

をいらん

うつは十二文なとかと侍り家路くのち
とんらんしてきつてせなる事あり
と桑水飯（すいはん）にはつりのせなりひらとまつけて
くふものなり

ほうとき

りくさうくわて

ひらいの法とは
無礼なり
夏かうし給ひきるとかのかさて法さへ須も
女のかん
夏かうは常の巻なりありて又女はとうの君
の母女ね君とはふへ
中将君もくうしをきて給へる事なれしえ
しをまいんたす
夕霧のすく曲ちうとぬとん実法（じつほう）はかなと

せんとはふかくおもしとおもふなるへし
さやうのあら葉をとりいろへ
落胤腹（ラクイン・ハラ）をいふて
むかしのさうしまてあまたさかん
ちられたるものゝ寄あり紫式部ゆかされ
ぬ事を源氏の君のれ無念よせつかくの
神の詞や
いとあやしきまねはかりけり思へるを
此の人は紫君のまことすゝしきても推（スイ）
参したく思はれしと中納言の実法（ジツホウ）の人

あくまんしやくまのをしよりて外様（トサニ）に
居もなかりし
なかしはきぬときに咲そのちるを惜しくて
あはれとし老は西（ます）人といふてもおしき事
なかなかあやの所ありあらん人の心とそ
きこえける
あまくたりのまきせんさいみちも色の紫
あはれおくしこの名をとゝめぬる
みなりゆきし前栽（センザイ）とよあまこれをとゝう
色もしくしたるまてしこえりなさう色

らんけるをいふなるへしこころもなかりし所
色へかはりしき木の葉ちりし山のみね
うきふかるをとしいつるなかりけりたらん
こころあるなかり

右の中将(まうし)てはまゐらしたまひりて
柏木(カシハギ)の中将なり
中ねをいひ給ひておとこはかなしみあはれ
おとこは内大臣をいふなれ玉かつらの
兄と弟御物語之
おやきみあかりにてあはれしつつなるなり

夕霧の事とこなる所は額(かく)字さされ
と逍遥(ヨロウ)なりつるよりはいたみてこそなれ
面白事有りいふ
きぬさいとふ今も御ゆりけれとと申し給
これは玉かつらの返歌と兄と川とい
ひりつきそて我家(ワガイヘ)の曲(キヨク)の詞とたりて出す
雲井雁のかえり夕霧のかりかしてさ
めと蔵とかくもいやそてなきやう
しきものかうしのなりて
そうの御さうかりてきやされむ

この御さかきを我家の祠にまつりとし
きむこ今の作法をいふて
なもうる御所にてするは中なり祭祀と
これは玉ぐしのかりとひなふすこと
はうし紀伝まことにもろもろのかなしみをしく
和琴（ワゴン）の事は河海の統あやまられしなれ
あるまじや
このわざりよさかきを奉にあらはれいかりなと
玉ぐしのきをいとされつき
ゐしあつまりとそみえたりゆゑならふ唱うなれと

御おのにあそひもまつらむの作さきをみえを
は今の世ありは志りもとこさりは古道をあ茂あや
としいてつしたかひりょあるし
これは源氏のことをさなり
和琴（ワゴン）は伊弉諾（イザナギ）伊弉冊（イザナミ）の二神（フタバシラ）の御代（ミヨ）
よりそこなる器（ウツハモノ）とてんとも日本紀（ニホンギ）にみえた
はみえて伊勢を天岩戸（アマノイハト）な天照太神（アマテラスオホンカミ）の
ことりの神宴（ミエ）よりいそさろときもみゆ
最初（サイシヨ）は弓（ユミ）六張（チヤウ）をなへつとうちあはしたる
より和琴といふかたちをゐさりつたへしかる

ともなり今の代(ヨ)に巫(カンナギ)乃くちよせするとて
弓の弦をうちて此事よりおこれる
也やうものつかさハ男官をハ図書寮(ヅショ)と
いふ女官をハ書司(フンノツカサ)といふ和琴(ワゴン)をハ書司
乃女史(ニョクシ)あつかりて其名をといひたるなし
名物ことハいふ又朽女(クチメ)或(アルヒハ)宇多(ウダ)乃法師な
と和琴の名物これ国より出来れる器(ウツハモノ)
なるによりて此国の楽器(ガクキ)よりも上に
おかるゝ事となりされはなりけれと
ものゝおやとすとそいはれける国のわ

らゝの和琴の上手なる事をいはんとて
そうなれ

ことはひきひらをふすいの傍かくしられし
狛氏(ココウヂ)十巻抄(クワンゼウ)云と引きとつひしといい
三絃(セウ)あけこ引者ハ人のかれさあそれ
らとはひいらのをさきかつほとろ物う
らそめくしくもとくこさしやゝれあひ
らうゝ自由(ジユウ)の曲(キヨク)ありしとせゝらすゝとん
ぬゝすありこと節(セツ)よ同しるせとゝろとれて
やさゝあり閑(シツカ)にをとへ人のあか足(アシ)よし

なりし足よりの風情にまかせのよみ字
は事の字之和琴(わごん)の字よりあらとさいて出
今のおしくらとつけさる之不一用之
ぬき川乃瀬々のやはらかれといさすらしう
うるひ給ひとやさくうれはいとをしらさるい
給へ

ぬき川のせゞのやはらた枕といへん
とく下乃をしと略してやはらかに時よ
やはらかなねやをやさしるつまと
ぬき川の詞なりあり玉ふる意の事

と志よせくるひ給ふゆへありしとしう
ちらしひかふえけるなるへし
さ無いか今のめくらちぬきさや
如(せ)や

ほし無きんなる利う
唐(タウ)乃書(シヨ)なりは想(サウ)夫(フ)憐(レン)とかきりこてなりて
相(サウ)夫(フ)恋(レン)とかくんはおもへる事なと思
かよふ御ににまりて母はうのをしてい
くさしといへり

おもふそてふれたる道なりつきあらは御なん

おもふてハ物をしらぬ人を
こゝろ中をたくみて
心ハこれをしらせこれハ玉かつらの也
いかなる風の吹そひく
これハ玉かつらのことを也
みなかきつめぬ人の母なりハ
是ハ源氏の帚木の詞也
ゆふへの物のけのかよかゝりいそ語りしを
すきし雨夜の物語の次よあそしこれ
事をの語ひしかて

あたしのゝこゝろゆき気とみいりとのかきねと人やとかめん
野宮哥合壽哥頃
梅も桜もうつりにき花の色とうつりひともろ露ていふ
今案りとのかきねハ仲みかの事をとそり
山川のうきかわねをもかりよ家ハうけよみそことれ露
此歌ハよそ詞をなつかしと宿の部にそ入り
みをやしうハ古れのうきなをあやしこ語ハ
むハよつりしのつきをも
まゆこりもんかうしとのまふ
これハ玉かつらのはゆりゆくを見よみたれ

御心をくるしめ給ふ

山ゝのこすゑにむかひ給ひこのよの猶さしも誰か聞ゆらん

玉の緒のみたれかゝりの事ともなく左門の

大殿も事あれの都へ帰らんとしたいかん

あはせ給へりしのゝ

こゝろましらぬとうらみんし給く

中納言あまへし未見出し

となりにてわかれき納言のきえのそらにかへりて

納言殿のもとへ人々まいりとも二人まいりこれ

ひめ君をともなひ申て我まに道さまへ

さて源氏の思ひ給ひけるのちのちるなをは

の事ともより給へり

つくりてたまはれつきすいふ利ては

もくられあらは我か御車につきなひと

御は納言なとねきとの人をいそきて

あそまことよあれわれのよ作くさしきとそいく

ゆく御しかはあまたきれし

よるきめよくゆきとせしあれぬのえんとて

源氏の姫君をつれひきまいらせんれくのと

作くらし給ひつて

聞えけれはくさも
人をせしとも世のつねなき也
いかにやと思ふ人もくるしからん
これも源氏の君なりしやうなるかりしや
せましと思ふあるひさしきかくれの也
くらひるまれもむつかしきとて
内の御かいとのもとの御かしれ内むしもあ
をはの君の事に
うきたりしそおかえあるつゝしまつと
かの御しとにはうなむ中くれわしわか

いちもつとも面目したるに
あるおとゝいちりもつとこの世のことはれたる人
ちりもいかのぬるゝ人なりとうかれすこの世よ
とかくるはるや
おもひしきるかむしをかしつきて
おもそくしきるには面おこれなしむ
人の腹より御むしをかをえくししれぬ
かくて源氏といまにいる事しもなき
いおほくも御みの縁なるさやうなり
みえけれはいふしより隣もあかりなく

思ふ事やかゝせたましきをうとても む
さきのうへかとなり御子のみきさすに
るべきを寒れゐ事わらすくちなしく
雲井なりて
くも井さつりとみさらんかきりて
夕暮の中ねの侍もありけるのち
むこりを行さうんと思ひつゝて
侍りけりゆくりをなくいとほり侍り
雨のかゝるもひかへる井のかりの
御ふくまうり侍りて

きさらぎ
伊勢物語よむとてわりなきを器(キ)
量(りやう)なしといふこと
ことしき人もつましきまくしし事
をあしと
ことしきいふてにしきくしきいは不及(ヨヨハス)也
過(クハ)不(フ)及(キフ)なきを中庸(チウヨウ)のみちとするに
たてまつりたるといふことありけり
人のひとりいひけるのうへか
ひくちひく

おほよそみくみさせてまつらんと
これよりは雲井の上の事なとの給ひて
仏の御事より神の御事かんなの神さまよ
人のことはとてもおもひすてさせ給ふへき
事にはあらす
世の中にはさまさまの事をいとおしく思ひて申し
これを雲井なりのうへ
さるところの君しあそひ
なとこの君はわかつりくさりしかりの女
中将のいとおしく思ひ給ひきんかの事に
此あまたの君をはうしなふ中将の御かた
神いとしも御人との神と思ひしりは給
さらにふかくおもひわれをしりやかれ
とも事のかなりしをも給ひしとも
御はなとなり思ひ給ふて
くれ給ひさらなるしめなくおかれて
まうへにはやかてきありて御つかひまいりた
きこしめして
内のまへくれのまつりさらにとも御の
こゝに給ひてましたまへまかりきこる事を

ほくいとへの我身をやうなきものゝつねと
みやこにはあらしとてあつまをさしてやすみ
との事にあはれとおもひしきに女御は
此のよし
此の御ほとは海よりふかくおもひけれはあさく
こきてんの女御の母かたをいふなりやわ
さらにけれ梅花をとみなれや
中ねのさそひとはりきこゆるかりのなくなく
きこりたちや袖を
うちにも本の中ねれんさうしといつ色とも

まいく室恵(ミリヨ)もおくてをは丸をうけ頭い
うしな風とも
たそかれ多やかりなくしむとく
あしちかき風邪とおもふ夫のむく
ほとろ前なる花を
河海に二乃ことをいふこれ侍り後の一説
ちかきは松茵(ナツタツ)し侍り
かゝみより思ふをせられ侍り
まきのとをみにていりしおもての糸
のりかひかれてつゝみのぬきあけ

いらく思ひ給へて
くて他し給へりしをいたく井くしうら
あなやわれ
父おとゝこそしかへのそうれたる給へなりしを
あつまの君ありあひくるものなかて
てうあそびし給ひしと
双六のまきてさめてこそろしてんやまし
また河内の一流きゝつへきや
るふりそそとしゝう思ひ給へて
かの君の顔て

おほつぼとは
延喜斎院式云大壷一合 今案小便
器のうつて
かうのへとも太とく
承和九年十二月廿七日格云妙法蓮華経最勝王経亡別一人毎年聴度随業各入在近江國妙法花并最勝等寺其試定者始従廃不盡令暗誦
今案近江なとつるくそのゆゑは寺の
大津にありくつりけるかゆへ未半し

に大臣(タイジン)まてもやありしありけるよしかりく
あやしけるかな色し
あえなくあん歎(ナゲキ)くつ
あやしけて 栄花物語にもよれあ色な
有し中にも川つ月なく
このころうし京よりくだるさ海よ
弘徽殿(コウキデン)女御事く
たまうむかひ給ふれとも
提婆品(ダイバホン)云採(サイ)菓(クハ)汲(キフ)水(スイ)拾(シウ)薪(シン)設食(セツジキ)
鬼いとあやしきさま人のひなもとし

ころまうい物語の家り 批判まうさんて
いとふかひあへいかと
とはの者ともとしく縁しと作をも
前事とかて
ひさしのと又とりしこまりれ
うしころれかとうまうまし寄れとも と
又いかあり
てんかく有て
河海りはまなのましつちくりとし
きりとさうされより今東行草(ギヤウサウ)の字

かくて六書の点ところく假名と草
の字は形草なる物とかなれしも真名
のうちにありしとも筆跡のことし
き点ともなりとはいふ下の詞よりて
はかなりいふにつきてかうれしとともかん
えをとわきまいらむと侍りけるはを
てんちなるはといふとおもえける

みなせかえりとよて
手跡のあしき事をいふ
くさわさびらの此かさたにてそあひかんなきの雲なと

ところなる因子の儒流ひとめ目ハあまた形美をいひ遍
と東此なる取捨をいふくあひとんの七
字なしあ形大なるは形はなて本事をいひ
つ形りなるしあ葉よ無ん本惹の事
の形とやつきありや

おやのしらかの
大川の水を大のいふ川と書しらくるを
りや又地の池なるありやうなるしある葉
の字は心なるてなるやりかたよるとしるる
んなるへし

えいらねとやあんもとも恋しとみゆる那
女御乃まゐれんのやよおもやあんこれ
なりともなしからあくめとやりしてわ
内との浜にて
却ちかゝるら大海の乃浦より浜ちかよきと浜の松
四十四のなおとよのうらて
我れいきうん人とあまん人ゆりなん
きて恋ん人を女御のゆゝりて大会と
思ふもしきとく
まつのゝまゝふかうとく
ちて浜の松といふ結句と合せのうちよ
そりのしら内て

並五 篝火

此詞并歌為奏名 源氏卅六歳 患秋の始や 又嘗並也

夏の月なきやとくは
蛍なれといまさあつき比のむし
とふやゝ又立秋節以前土用中なれ

いまとよみけりや

行末のきまでよりいまのたりまたなふ燈とあるハ

くりたへの燈ハあらのかれなきゆかりみえて

これよりはふかいとの燈とくもり来

あきなりわかれかへて

くやしく

すゝやそてかとよふしまて

こちはくに今より帰り

夕暮の中ねかふも木の弁少将この

三人や

へし

弁少将ひやうしうちてきのひやうしう

こまもとくもしりぬらひかり

桓武玄孫之

寛平御記寛平二年平利世者皇子王

二世之孫皇后之才也而声長蝉秋初誤

秋虫之嘯葉間親聴曲調究如松風之動

暁後宴来閑暇所令歌与青鳥数千

行并綾羅衣裳と楽ひしうふ志と

虫の称よめる人のうけ御流の西わかり

志いかきのはつくり

よひかふとて事さけのよてえつかさころよありやて

ゆふくれそむしておもしろくなりけれはうちさ
わさす

柏木の中ねは玉かつらの恋をまよいのりと
なる事をいまたしらすして心をかけて
和琴をひきさしたるかかつみてよそのひ
かりしきんをもいくしれしく耕
酌しくおもしろくけてもゆきさされ
とりわりむかし司馬相如か琴をひきて卓文
君か心をとりしかは文君より相如か許へ
かよひまいりたるしるしありや

並六 野分

以詞為巻名源氏卅六歳の八月事也
又竪並也

くゆ木あらき木のまゝせ
木の皮をむつかしとあらき木とるいふへし
末枝のおもくひけむかしより秋なりんとする
人もふすまのゆりけると
指遣丸わすれ善枝ふきまかせとこれ
ちかの風ならせり種々ならけり
末枝よ思ふにしてまかせつけはつまてうけれんは 悪之

又ゑ元良親王の承香殿のとしこにつかはしける

秋はいつまさるとゝひ侍りけれは秋をおしう侍りといひけれは後撰

はるをとられはつねといひく侍りけれは

大きさ婦よん侍よ世りと春のはなはまさると申し

又髭三すしとよき人へしもと

春はたゝ花のひとへに咲はかり物のあはれは秋そまされる

謙徳公いまた宰相中将の時應和三

年七月二日に表達春秋の歌合の

事ありけるのさう

花といふ紅葉といふむしの音色、おほく秋はまさり

今案万葉集の額田王の歌とふしらん

して嬉しけれとよせたるやましきにつ

おもきゆへ

聖もき倒のこゝろを知らしめしたる元の

いろいろに吹かけ

杜詩云八月秋高風怒号

草むらの露の玉とみるてまりけり

古今 躬恒長歌

玉のをとけてこきちらしあられみたれて霜こほり

人々のいさめあへるやうなれとそれはけなるまして心より
祈と

夕暮は嘉密法の人なれは峯の上をみ給
事なけなきまては思より祈とおもふ
む人ともなと思ふへきなりなけなき成とて
うくひすなきにて

わかつきのうれしよ見なあひ給らんなり
これはお悩ましき事なれと紫のうへよ
女とも連の頭て
なくうちあひて侍く

風乃病はかうりあひさうし
さそとなへしみの侍と
女郎花と申てまぬき莫なりうるを
もうれなり
志うれぬふとにおかれゆふの御かりもふれいひ給
可御きもひしやと
鳥のかりも後ろく侍従のさきねとん
中宮の御あうり鳥よふれきたる
のうちとくゆしく悩みて河海の麝香は
事かくひすきのへ人々次

これはことさいへと宗をとり一すぢをあけるとひよ
ときあるとの心をそなへ
まろうどありたまへるけるひと中宮
の御事を知思ひてならせたまふの
上をうやまひ奉る事也
こちきひきをとして
衣架(イカウ)にかけたる御衣をとりかへしてまいらせん
なりと也
としくさがいちとの給
わしの上比へはやり給ふは治男さ
きぬおかりやるかたちよく事はんなりさ
の事とさてききなかいちとのたまふ
やへ山ぶきのさかりなるさかりなり藤も
まつはなかへる
立ちは花のとことと立ちにける思あるとも色
行親に十七の春になりきぬをわかちて給ふ人
くらゐ給ふ形なりなりなるつかはさる山吹の
花のたてるかいゆしのさかりしとありけり
のよろ人のころなり思ふなるそてもろうせ
給ふとみえるかは宗んなりの御心なりとも山

吹は玉つくりの意よかしひさぬと思ほへ也
御返しの此歌も合せをこのころつきいつし
いぬ花しめ
花文綾ハ有花文之綾也謝恵連詩云
容従遠方来送我鸐文綾云同しく或
説頭文綾之事もんしやかといふをと
しられし甚乃ゑ衣をいふ歯時ハ穀の
竪文なるをもちゐるや大略同事也此はれ
花とは鴨跖草の事をいふ衣のうつしもの
田の浮の様也

まさわるこそありなんめるらしけれ
明石のひめ君ハむらさきのうへの御かたに
承りおはしましけり
宮のうちはいとしうおもしろうおはしなん
三条乃大宮の風よりおもふなりけれたに
うつろはさりけりしも露うつりつかつて
きさ乃わかしのわかしと思ふなり
雲井の月をみしれ上のわかしよもあけ
色くのうまふなり
ゆきみてわかうつりやりし御東宮へは人ともこそ

かねてかみのなりしよりこの山へ給ひぬれと申ゆ
さりけりの色も思ひやらせ給ひや
これも紫の薄様(ウスヤウ)にしるしてかうやうり付
くらかとの名りしたるひとつと人々と
かなうや浪のたちゆるといふ物語よ
まことに八ひとのことひとひとつそみての山峡
ふりけりく御車あれと娥の色よ洲かそ
れしそれそて山吹りつきを給ふさぬか
ねやかなん
上宮更野(ヤタノ)かねもとのなりあひける

枝りけきく御とし雪のかりいかなくれ
しきたらへつとすみくとさうの時えし
まさひく御菓けりし人々共とせひ給
つかりしや
いはく野の外のなれよなと
そこの野への袖りかくありしやかん
うか色しく花ともかりしと御ちち
てきく女まくつかすり
まこと世給とく人とうちくよかれ
ありのひかき氏のむかきの御うとより

こなたへまいり給ふて
うつろふかたのかことも
此さきの上ハさて候て出る時ゆきと
三山吹ありしをへし今ものかなしきを夕
雪の思ひあるのふて
候きしぬとさくら山吹とのへられしと也
ちのられよやりかへりんたうたきし
よつ咲たる利くあひしあるりあひか
くそあるうし也
あはれのひかえたとうちなへたる事
われかれ下の巻にあり

花鳥余情第十六　御幸
並七　御幸
以歌為巻名大原野行幸ハ源氏卅六
歳の十二月の事也あくるとし卅七歳ノ
二月まての事也よあり又玉鬘の並也
ゆくあかほしつゆしつめしとあくつくよりん
事ならし

此一段はわしれさいの包み君の御事を
源氏の君乃いつくしよろしんとをなくゆへ
ゑのふ事也
さ乃おとなし乃勝をうそへてはなをして
何ゝ又源氏の君乃ちゝけのふ変也
みかとの父の御事としつりてかたわらになく
こえふ乃君り山さきの上代源氏と申つ
何ゝのすをとうかしもあわともしききゆらん
さま代々しつ法へてとよつりて
かのみかとのかたは事まつ念にも
桐壺乃みかとはなふ事をきこと代々を
おしはかりてうらしき事をきつひ給
事をいふなり
何くおりひつまなくきさやうなる御法はゝくなし
これを桐壺のみかとのゆゝりわなうられ
なる事なり思ひ給ゝ事のかなる御法も
てなしなとのあつかひとりましつゝさす
と思ひ給ゝかゝつの君と志のそ志さひさ
まなる御事はわしともへし給ふとく
おのこし代あるを本て大らつの御本とく

野行幸ハ仁徳天皇の御宇よりはしまり
て仁明天皇嘉祥三年光孝天皇仁和二
年芹川醍醐天皇昌泰元年交野延
喜四年大井川延長四年北野同六年大
原野それや中比白川院嘉保元年
大井河より嵯峨の例ハ仁和二年十
二月十四日芹河行幸行平中納言
嵯峨の山みゆき絶にし芹川の千世のふるみちあとハ有けり
とよみし時の行幸ハ延長六年十二
月五日大原野行幸の例を撰てそ利

大略李部王の記によりつゝしるし
あを色の人乃衣はえひうちの下かさねを献
上の五位六位まてきたり
李部王記延長六年大原野行幸甚装
束御赤色袍親王公卿殿上侍臣六位
以上着麹塵袍　今案主上ハ赤色の御
袍をめし給ふハまれ親王以下ハみな
青色乃闕腋袍下かさねハ蒲萄染之
これハ麹塵なれハ人のあを色と云り承和
三年大井川行幸にもこれをもちゐられし

凡このことかゝなとあらかきも鷹ありうつハ給へ
のハあてし来りの由よくひとをとまうけ給へ利
李部王記鷹飼躬王為青地摺布衣及袴
或用紫木蘭色狩袴小襖子餌袋
今案これハ王の鷹飼の装束に布かりきぬ
の摺の文なとハきこえしみえたり襖
子ハ下よりさうあるきまのうへをつ
くへし冠ハ壱纓のかりをとるへし仁和先
芹河の御幸なり行幸中納言大鷹飼の
狩衣なり衣ハ文なりねてたしも王の鷹

飼ノ事之

王の鷹かひとも御てふかりしかなる利
衣をとられしまつりて家説とも利
昌泰元年十月片野行幸左方鷂飼着赤
白橡地色摺衣右方鷂飼着青白橡地色
摺衣　西宮抄云鷹飼地摺狩衣綺袴王
帯鷂飼青白橡袍綺袴玉帯巻纓有下襲
着釼着有尻鞘王鷹飼入鄙之後着行縢
餌袋康保三年大井河行幸鷂飼五人鷹
飼皆雲客之巻纓色之狩衣袴唐錦　接腰

鞲餌袋〻〻鷹飼随身四人錦帽子狩衣袴
䏻纏餌袋〻〻以上各具ス大飼着帽子
今案諸ホ鷹飼装束先例いさゝか不同也
又もいつゝ飼と大鷹飼とかり衣をかはしつ
らさゝや昌泰の記に赤白橡とハいわゆる
色乃事なり黄櫨と茜とにて摺らう也
衣ハ青白橡とハいまゝ色の事也苅安と
紫とにて摺らう袴ハいまのさしぬき
玉の帯巻纓の冠釵ハ尻鞘あり此外唐
錦接腰鞲ホハ承保の記にみえたり諸ホと

ハ六衛府のとねり下をいふ成し
みかとのおりゐの御をおくもちいらるく
延長六年より主上赤色をとらせ上よもうせ
つ其外延長四年十月大井河行幸ホ
も昌泰之年片野行幸ホもわか色を着
御ありしや諸臣いろおり色乃袍を
着もう事也徂ホ一の忌には主上とおなし
くわら色を着る事あり白河院の承
保の大井川の行幸よ京極殿関白より
てわら色の袍唐錦袴を着しかしけ

外内宴ハ法性寺関白赤衣をきし給
ひけり御幸に源氏のおとゝまいり給ふ
赤衣ときこゆつきこと

御こしのうちよりわたりかうへとおろす
昌泰元年野行幸乃時車中之女瞻天顔
或出半身或捲簾面ゝ見紀納言記
大たねのさいなりありかりよし出ても京ふ
のよそひいとおさめきてやかなるひかとおかしく
仕まつりけり
昌泰元年片野行幸右大将菅原朝臣供
奉給 西宮抄云公卿如例衛府公卿着弓
箙又如例 と葉大ねハ例てハ下ら紫と
お幸之大臣大ねハ清狩衣をいせまりか
らひろり鬚黒の大ねをハ大納言にて仰けり
りてやかなるひとゝひおかりけり
御はそくともみかな紙しけりかようなるひかな
とりあへぬ行幸有り
西宮抄云天皇服白橡御衣延喜御時天
皇御右近馬場改着直衣云々 昌泰元
年片野行幸御赤白橡唐綾御衣入埜

之後着攏御衣にて今案なりとせ給ふ
後主上の御ことはさしよりおはしけれ
一例もあり又狩衣なとめされけるもみえて
六条院よりおほみき御くたものなと
延長六年の例とうつせり此時六条院は
宇多御門の御事なるへし其の物語
ほと六条院との作りあはするものにて
蔵人の左衛門のそうを御つかひにてきし一
えたてまつらせ給
延長四年北野行幸の時蔵人左衛門尉源
俊春を御つかひにて雉一えた中宮へそ
たてまつりし例とそ又蔵人左衛門の
せうをとく六条院へまゐらせられしや
御せうそこにはおとゝやゝの折のことも
ものふりにたりけるらん
作者の詞にやうの儀しきあしき
とも女のえわかれをくちつたへか
きこしめしつゝなくなりたるも
太政大臣のかゝる野の行幸につかうまつりし例
給へるためしなとやありけん

御方〻りかゝれ給ふともいへるなりけく
仁和二年の昭宣公（セウセンコウ）の例をたまへりけるにや
源氏の君は此時太政（ダイジヤウ）大臣の例也
なかや山御幸つかうまつりにほふ〳〵と給ひやすからん
大殿やとかゝる山のこゝろはやすくなんなれるをとこ
と来も御門の御製（マイ）に帰らせ給ひて太政大臣
の位なりし源ふ事をの給へり源氏の御迎
定の事どもいふあいとて東宮の行幸は
草ふかしかなしかれはそのつかへる給ふなり
むかしのなへり

いとらうたげなる御さまのこゝろ中〳〵しう
あらくてをかしかるべしさとみ給ふ
源氏の御ことやおほきいとこのかたきや
打きこし胡てりしとみゆきのさやかに見えやはみし
うちきこゆ富は源つてきこえ侍る家のよそほひ（家持）
今来うち聞しは打寄せしかりけるからあり
うちや山寺は志のての君の前にしの御
返しとりうち行つらし方の光は御門の
あはれ給へりし
あら月光は方にかなりぬとおもてみゆきにたえましかん

あまた侍りの様らしるしなれは御車乃法うちさしのうらへき
と業なるをきこしめしは目さめりと欲とてふところへ
目を霧にさしこきりくつ指や
そしこれはかりしら事をわれんなれはすの神は
御いのちのひかりへ参るも
しかはかりしる事とおもふての思ひと御文
はへりてそしそらる今こ事とこのれなかれ
おもんのやうにてこりけるをしるは氏神
なと乃御つとめをわするに左の今も思ふみゆる
ありしそし御夢は今はへりては内

乃おもくの御むしをうれしみんおもてし萩原殿と
よそ中へ参りて源氏の御せうとこそ中々すから
いま春日乃大明神の御心たまへりてへ参ると
いふ御前
大内乃御つかうゆひまくの御かたをきこえん御せうとそ
このみし給ふを大臣よそ乃かゆかくよりか
御ともに参る事
玉かつらの御ゆきれうしゆひよれしれかくく
を精しやせん三条殿の大臣の御あやこれ
事なし斟酌のよしを事をたる源氏の

御母の方より内のおくへ入給ふゆゑに
さてハ我か御ひとりとハなり給ひて
ゑちこの御寺ハいつくよりの御事を
三条の宮の御宿所なまりの寺ハ祖母(ソハ)
御服をおもひなき事也
御よそへしもハ給ふ御ゆゑんとて
こまかいと洗濯(センダク)の申て上の祠よきよせよとて
事ありて下りし又水の喩(タトヘ)ありけれハ
にごりの心なりゆゑなりとて
小ごりの末ハ濁悪(ヂヨクアク)世ともいふ也

おや御けさ御所にてさる所のことをつきさゝり
家にハ入りいまこそ思ふ折りてこそ
うちあけさ事ともあまたのつきに事か
く様にことく大かたにてなるとめくりて
しつさ候ふかなしきやうかれとれ
志それを又人のかなしさといふ也
えひらかの御さしわさきくのかたちの袖い
とかくとりいさて
西衣布(ナヲシ)襦や御くのかたちのは面(ツモテ)の
らちひらかや

六条殿もさくらのさかりの御いはひしけりつまや
う女の御そひきかきたまひ大きみたてき
これは柏木といふみこをつま横笛の御そん川
孫の巻わたくし下させおとみたまひて太さみたてら
名女さえたりたまひ給ひぬ
かうしいにありきさ海りなん
かうしと思ふとおはしつきと源氏のの雲
井のかり此事とおもひなくの給ふ祖母
ちのつまよめあうしそ給ふなり
むかしのあけく

宮も給ひてひかる君の御事をおほしいけるよ
あかしの上の此事とたまへのおほしわし
いとこえも
いかなる御心つりかあるへきことりなとひかさるか
をえつく
この事とは志つるほと雲井の雁の御事と
ひかりえさ給人なくはおほしつえ
ふさかなひそてゆきは女二の宮を祖母とはあけたまへり
三条は女三の宮の君これ祖母(ウバ)也又源氏
の心のこともあかしの上は女の御母也むか

はゝの君を源氏の御はゝといへるはつひのよと
いふ母ありしに也継母(ケイホ)は親母(シンホ)よりはまさりしよし
本文あるによりていかさまにもそも三条
またいむまじき思あしくはへるに
いふしやこの御はゝよ
いふしやいつきゆるしあれ之
らくそあまよりし宗はり内にはれいまつるか
ふるきうけこゑくらけの赤句(コウク)之
御くしはあの御さしそく
髪(カミ)上(アケ)の具足をいふや

をちかへりこや
これ紅のくちを入る程は深さをいふへし
うへ衣をもむつかしとてうらをかへしてきるも有
古今
唐衣日もゆふくれになる時はかへすかへすそ人は恋しき
今案に是は返しの花の春の歌
うへ衣のつまれは袂(タモト)をうちかへしつゝのみ
なるへし春の歌
こそてきぬのみを作り唐衣の下にきてたもとを袖のをゆかして
此書の歌
あか袖のをかれしにたもとを袂をかへしつゝ

これまてハ歌といふ事ニ段々と作り出しより
か歌みの歌かしこやいろ/\とわさ/\と語りける
嘲哢（テウロウ）の歌と
よしある事にもなりけりや
唐歌といふ文字の多き事
こゝひとつにゆくりなく入これハ
ゆくりなきとは不意（ユクリナク）とかきていふなるや
うち風からうへ
動きなき語韻り
裳のこしをゆひて

いよ/\作りなしけん作り様ハ
このいろはのことわりを語る事のいそ
ぎとゆるさあらし語るにはいはゞ色を染め
てをけ侍りなとゝいふなる利
らくしやうもゆるされたるものとひたてゝはなかくてあまりのよ
後撰十五うたのうへにて卓よりく
ろめのうたをもちてもとものこゝろよりこゝろ
亦くみうといふかりとくりし
何毎にも風ならぬを由らんおもふ歌をとり出して
よそへ語るうありさまにしらずよそにすなはちよ語りもなくしらせし

ところは裳(も)をりよせへつるを
あるよしときこし給へと
是は内の御かゝりの木をとゝめ給へく
くり給へる新しき事なるをめされけん
ちるうらしとや申し給ひて
まいらせられし御かゝりし給くらふそしるを
なかれ侍しか
これも源氏の内の花ちりまかりの木
のなかとやかの小朝に
梅かえの御時とも申ゆるしあかりあるわけり

内の御かゝりの御所の事宮の巻より
たいさうなかしゝの木
近江木乃事に
中将かねみちさまひかふり
柏木紅梅乃木に
ときこのそわらも宮まいらし給ふ色未御
くしさあれしと
日本記第一云天照太神踏堅庭而陥股
若沫雪以蹴散　今案かれつかれそう
これ庭とあるへ未事之そされとのみと

乃悪行(アクギヤウ)を天照太神の怒給ふ時ますさと
のまさと給りくいさかひとなしなを
きの事くるれ庭ゝともさめしきちり
しかふつて照太神とことさのなれ神と
ハ御せうしくまま又あまつの君と弁かね
ともかしいなれいあまつ乃君のさうさく
しか事をさしてふさ
中ねも天乃いさと作しこそり給なんやうや
もとうんとく

中将ハ兄(アニ)之近江乃君ハ妹(イモト)之古今仮名序(カナジヨ)
注よ素盞嗚尊(ソサノヲノミコト)ハ天照太神の御こゝろ
ゆりといつりたうくくこれりようへしを以
乃春のこゝりかゝ給へいかやとうゝへきさや
ろふさいよ我あて雪よあまつてふ変
より一観(ルイ)りゆきしうゐ縁(エニ)之
隆よ恵乃風うやく
たゝへゝらいひうれ事を人をやさひく
つまれく時しうのりしさいふをつまと恵
といふや

以下
5 丁
白紙